

川村二郎

— 古典を読む —

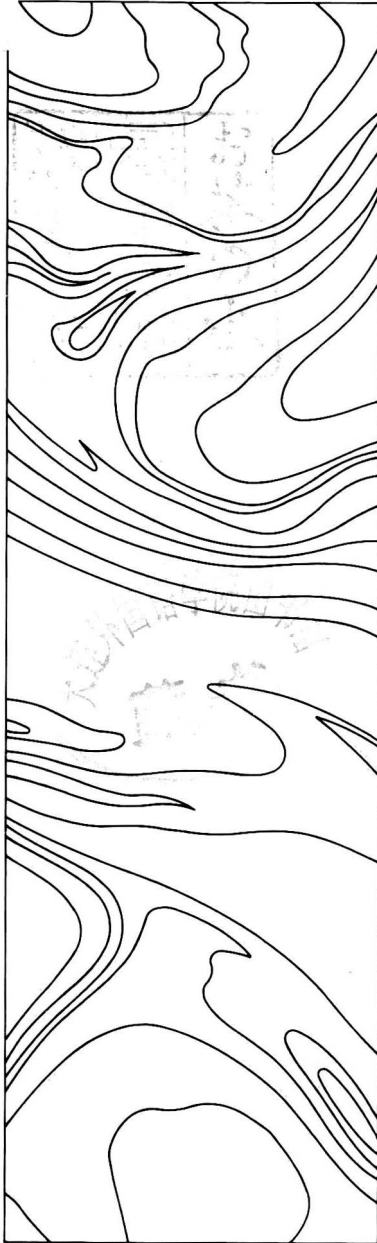
16



里見八犬伝

岩波書店

見八犬伝
川村二郎



岩波書店

川村二郎

1928年愛知県に生まれる

評論家

『限界の文学』(河出書房新社),『語り物の宇宙』
(講談社),『内田百閒論』(福武書店)など

里見八犬伝

1984年10月19日 第1刷発行©

定価 1600 円

著 者 川 村 二 郎
発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004466-4

目次

目次	目次
一 女神の呪詛……………	三
二 聖女の危機……………	三九
三 孤児の愛……………	七三
四 幻の名所凶会……………	一〇五
五 性の明暗……………	一三五

里見八犬伝

一 女神の呪詛

大岡昇平氏の『少年』は、「ある自伝の試み」と副題にある通り、著者自身の少年期の心の遍歴を、記憶にもとづくきわめて綿密な過去の再構成を通じて描きだした著作だが、この中に、中学時代図書館に通って『南総里見八犬伝』を読んだという一節がある。それまでに同時代の文学を耽読していたが、文学について確実な知識を得るためには日本文学を勉強し直さねばならない、そのためには物語の古典たる『八犬伝』を読まねばならないと思った、とある。

しかし一緒に読んだ『水滸伝』や、『演義三国志』など、中国小説の方が面白かった。中国小説の話の進行の濶達さ、規模の大きさに比べれば、日本小説は想像力が貧しくせせこましい。

「この波瀾万丈な古典的伝奇物語からの印象は、暗いということだった」と、大岡氏は少年期における『八犬伝』経験の感想を記している。

中国小説との比較はともかくとして、「暗い」というのは、はじめてこの大作を読み通した時の、ぼく自身の印象でもあった。大岡氏のひそみにならうのはおこがましいようだ

が、自分一己の読書経験の回想から、話をはじめることにした。

大岡少年の『八犬伝』経験は大正末年、読んだ本は博文館刊帝国文庫本とある。こちらが読んだのは昭和十五年から、その三年前に刊行をはじめて、昭和十六年に完結した十冊本の岩波文庫版によってである。昭和十五年頃は中学一年だった。『八犬伝』という書物及びその著者滝沢馬琴については、もちろんそれまでに一応の知識を持っていた。最初はたしか『珍妙八犬伝』と題した、今なら劇画に仕立てる所だろうが、ページの上半分に絵、下半分に文章のついた子供向けの粗雑な再話本。小学一年の夏に安房の富浦へ海水浴に出かけた時、この近くに伏姫ふせひめの窟があると聞いて、行って見たいなと思ったのだから、その前に読んだことは確実である。化猫退治や虎退治、高樓の屋根の上での格闘や火遁の術を用いての逃亡、そうした一々の挿話がたがいにもどう結びついているのかはよく分らなかったが、一々それなりに興味をそそりはした。小学校へ上る前から読んでいた講談本と同じ種類の面白さがあった。しかしどうにも理解しかねたのは、お姫様と犬が山の中へ入って行って、やがてお姫様が切腹すると玉が飛びだすという冒頭の物語で、その面妖な不可解さが、たとえばその頃近所の氏神様(東京中延の旗ヶ丘八幡)の境内で、お祭りの時に

小屋がかかり、入ることを許されなかった小屋の絵看板に、白衣をまとい髪を振り乱し蛇を体に巻きつけた女の姿などが描かれているのを、ぞくぞくしながら眺めたのと同じような昂奮を味わせた。

中学に入り文庫本ぐらいは買える程度の小遣いを貰えるようになって、まず『八犬伝』を本屋の棚から抜きだしたのは、その昂奮の記憶が持続していたからにちがいない。

そうして原文に接して、中学一年生には高尚すぎる講釈の類は適当に飛ばし読みしながら、とにもかくにも全十巻のページをめくり終えた時、まさに「暗い」というしかない感情が、心をひたしたのだった。「暗い印象に打ちひしがれ」たのだった。

もっとも、大岡氏がこのように書くのは、さまざまな青春の惑いや鬱屈の中での読書経験だということを、浮き上らせようとする意図からかもしれない。中学一年時代の当方に、大した鬱屈などのあるはずはなかった。当然同質の暗さにひたっていたわけもない。

にもかかわらず、大岡氏の文章にこだわるのは、先に引いた「この波瀾万丈な古典的伝奇物語」云々の直前に、こうあるからである。

《何とかいいう山の胎内くぐりの岩の描写、悪女船虫ふなむしが春をひさぎつつ客を殺すところに、

妙なエロチックな刺戟を受けた。》

あるいはこの文脈で、「エロチックな刺戟を受けた」ことと、「暗い」印象を受けたこととは、一つにつながることはないのか、という気もする。少くともぼくの場合、ほかでもないこの双方が一体だった。船虫の売春殺人のくだりは、最初に読んでから四十余年経った今でも、部分的に暗誦することができる。それほど強烈な感銘だったのである。そしてまさにその強烈さが、禁忌にふれている不安を誘いだし、不安が気分を暗くしたのである。

何はともあれ、その部分の原文から読みはじめることにしよう。『南総里見八犬伝』第八輯巻之八下套、第九十回。(岩波文庫本による。ただしルビは適当に取捨する。)

話表賊婦船虫は、去歲の夏越後にて、犬川莊介義任に、酒頭二們が撃れし折、独媼内を伴ふて、遠く武蔵へ逃れ来つ、豊嶋郡、司馬浜に程近き、谷山の頭なる、人の白屋を購求めて、才に膝を容れしより、聽て媼内と夫婦になりて、生活もせず虚々と、半年許ありける程に、不義の貯禄はやくも竭て、せん術も

なく苦しき随に、夫婦窃に商量して、又大悪事を計較けり。是よりして船虫は、十字街妓に打扮て、夜毎に浜辺に立つものから、客を掖べき与のみならず、その懐に東西あるをば、構合の折唇を、まじへて舌を噬断て、殺して尸骸を海に棄るに、媼内は妓有になりて、初よりその辺に在り、倘手に及ばざるものあれば、力を勦して拉ぎて、走することなかりしかば、恚ても人の知ざりけり。

『八犬伝』は第九輯卷之五十三、第一百八十回でもって完結している。したがってここはちよと、マラソンにたとえれば、折返し点に当るあたりといつてよい。しかし船虫に關していえば、最初に登場するのは第六輯卷之一、第五十二回、浅草に程近い阿佐谷(浅茅ヶ原だろ)に住みついた盜賊、鷗尻の並四郎の女房としてである。

「この女房船虫は、年歳も三十のうへを、六ッ七ッにやなりぬべからん、物のいひざま進止まで、よろづ男めきたるが、さりとして容貌の醜きにもあらず」

というのが最初の紹介である。そのあと、わが家に泊めた旅人を就寝中に殺して金を奪おうとする企てが裏目に出て、逆に亭主は殺され、自分は捕われの身となるが幸にまぬか

れて逐電する。次に姿を現すのは第五十九回、下野国庚申山麓の郷土、赤岩あかいはら一角の後妻として。一角は最初の妻を早くなくし、二番目の妻も早死し、その後妾を何人か持つがいずれも長続きせず、ただ一人、武蔵の方から流れてきた船虫という女だけが心にかない、妾から正妻の座に推し上す、という話になっている。実は本物の一角は山猫に食い殺され、山猫が一角になりすましていたのだと、真相は後に明らかにされるが、そのくだりでは、普通の人間の女は山猫の淫欲に精気を吸い減らされて衰弱し、はては命を落すのに、

「船虫といふおんなめ妾は、邪智逞しく慾ふかく、行ひ穢れし妖婦いんぶなれば、彼同病は相憐み、同気は相歎ぶ沿習ならひにて、妖邪に触れても恙つなく、且妖獣かっのこゝろに愜かなひて」(第六十回)

正妻に直されたのだと語られている。つまりはじめは要するに悪党のこざかしい女房にすぎなかったものが、怪物の精力に対抗し得る、いわば超人的な性的能力を具えた「妖婦」に成長している。

もちろん怪物は結局神助を得た英雄に退治され、船虫はまたも逃亡する。第八輯、第七十四回へくると、今度は越後で、また「強盗の妻」になり、「大悪事」を働いている。そして例によって夫は殺されるが、この土地でも天の網にはかからず落ちのびる。

「他賊は左ひだり生まれ右みぎもあれ、那かの船虫を走らせしは、熊を殺して胆くらを採とる、憾うらみに何ぞ異なるべき」(第七十七回)

と英雄たちに齒はしりさせろのだが、実の所、読む側も、もういい加減にケリをつけてくれと叫びだしたくなる。しかしその苛立ちには、幾度くり返し危険にさらされても、そのたびにしぶとく切り抜け生きのびる術を心得ている、「妖婦」の超人的な才覚に対する驚嘆のようなものも混りこんでいる。

そうしたはての、第九十回である。さしもの妖婦もついにここで年貢を納める破目に立ち到るので、かりに『八犬伝』を幾つかの物語の連鎖という具合に読むことが可能だとすれば、「船虫放浪記」ともいべき悪党物語は、この回で完結することになるわけである。化猫と同気相歎ぶことができるほどの並外れた女が、辻君にまで身を落すのはいかにもあわれな成行だが、考えて見れば、日本の物語の伝統では、超人的な主人公がいつも必ず悲惨な淪落を経験しなければならぬのである。作者にその意図が毛頭なかったにせよ、船虫の淪落は、いわゆる貴種流離譚のパロディーとして読む読み方を拒んでいない。牛の角に突き殺されるというその最期を引きくるめて、そう考える。

しかし先走りするのは控えて、前に引いた第九十回冒頭の文章にまつわる回想を、もう少し紡ぎたい。

一口にいつて、中学一年生は、『八犬伝』全体のうちでも、最も具体的な性に関する知識を、ここから教示されたのである。いうまでもなく随処に、性的刺戟を孕んだ情景描写がある。任意に拾えば、化猫の亭主が殺された後捕縛された船虫が、色仕掛を用いて護送役の武士をたぶらかす場面は、

「仮の妹伏の三三九度、媒妁不用の盃は、仇と情の細々言、煮染の肴を抓食ひ、冷酒もはや傾尽せし、半酔機嫌に春は来て、はや引容るゝ夜衾裏、甚麼なる夢をや結びげん、楚の襄王にあらねども、雨の箭頭に雲の盾、鬪戦数刻更闌て、疲労果たる逸東太(武士の名)は、前後もしらず臥たりける」(第六十七回)

といった具合で、「雨の箭頭に雲の盾、鬪戦数刻更闌て」などというのは露骨といえばかなり露骨だが、童貞の少年には想像をめぐらしようもないことで、「或は巫山の雲と做り、或は楚台の雨と做て、俱に臭骸を抱きしより」(第九十九回)というのと同様、婉曲な修辭として受け取れなかったはずである。この種の表現に対して、「媾合の折唇を、まじへて舌を

噬断て」は、実に直截な刺戟的效果があつた。

これが実況となると、さらに刺戟は増大する。第九十回は冒頭で船虫の現在の境遇が紹介された後、文明十五年正月二十日の夜の、芝浜の賑いが活写される。漁師も百姓も商家の丁稚小僧も浮れ遊ぶ日で、辻君も稼ぎ時である。船虫に袖を引かれて素見の客が這々の体で逃げる所など、いかにも猥雑な滑稽味があふれている。やがて夜も更けるが、それまでに思うほどの儲けをあげられなかつた船虫が苛ついている所へ、一人の旅人が通りかかると、しおらしげなこしらえ事を言い立てて誘うと、旅人もその氣になる。

口説くをうち听く旅客は、隈なかりける月光に、見れば寔に趣ある、色さへ香さへ憎からぬ、こは未曾有の夜の花、然しも些小の価にて、身を儘せんといはるゝを、賞翫せずば宝の山に、入りつゝ空に還るに似たり、と尋思をしけん、莞尔と笑て、「原来稀なる孝行実義、剛才その情由を聞ながら、買ていなすば情も慈悲も、知らぬ夷狄といはれやせん。仮寐の臥簞は何処ぞや。」と問へば船虫笑しげに、「恥しながら塩竈の、蔭に蓆を布寐の手枕、這方へ来ませ。」と